

## 2019年度 理論言語学講座 概要

時間：19：00－20：40（100分）

前期 2019年5月13日～ 全10回（祝祭日の講義はありません）

月曜日	理論の発展を多角的に考える	
	<b>生成文法Ⅱ</b> <span style="float: right;">高橋 将一（たかはし・しょういち）</span> <span style="float: right;">青山学院大学准教授</span> <span style="float: right;">【生成文法】</span>	
	講義概要	<p>本講義では、近年の生成文法理論の発展を多角的に検討します。チョムスキーの近年の論文を取り上げながら、現在展開されている枠組みを理解し、理論的想定を検討していきます。また、言語の起源、言語能力の脳内基盤、子供の言語習得などの研究で得られた成果や知見をもとに、言語研究において解決しなければならない問題を考えていく予定です。さらに、右方移動を具体的な現象として取り上げ、構造がどのように意味と音の表示にマップされるのかを検討します。上記は大まかな予定であり、可能な限り受講者の興味・関心を考慮しながら講義を進めていきたいと思っています。</p>
	テキスト・参考文献	講義中に指示します
	この科目で前提とされる知識など	生成文法の入門書の内容程度の知識を前提とします。
プロフィール	<p>青山学院大学文学部英米文学科准教授</p> <p>統語論、意味論、統語論と意味論のインターフェイス</p> <p>2006年マサチューセッツ工科大学大学院博士課程言語学・哲学科修了、Ph. D.</p> <p>主要論文：The hidden side of clausal complements. <i>Natural Language &amp; Linguistic Theory</i> 28:343-380、More than two quantifiers. <i>Natural Language Semantics</i> 14:57-101 など。</p>	

	<p>文法形式の多義の分析から文法の基本問題へ</p> <p><b>日本語の述語各論</b></p> <p>川村 大（かわむら・ふとし）</p> <p>東京外国語大学教授 【言語学特殊講義】</p>
月曜日	<p><b>講義概要</b></p> <p>個別の文法現象についてやや深く掘り下げて考えることで、文法研究の様々な面白さに出会ってもらおう。今年度は、動詞基本形（スル）、動詞連用形＋タ（シタ）、動詞テ形＋イル（シテイル）、などを取りあげる。</p> <p>これらの形は通常時間的意味を表し分ける形式、すなわちテンス・アスペクト形式だといわれる。その理解は間違いではないけれども、これら諸形式のいずれも、表す時間的意味は一通りではない。運動動詞基本形が一回的事態を表す時は普通「未来」を表す（「太郎が勉強する」）といわれるが、時に「ああ、家が燃える、燃える」のように眼前の事態を描写することもある。シテイルが動詞の種類によって「進行」や「結果状態」を表すこと、その他に「パーフェクト」や「反復」などを表すことはよく知られている。「過去の助動詞」と言われるタの下接するシタですら、「昨日ご飯を食べた」（過去）と「もうご飯を食べた」（完了）との違いが取り沙汰される。それだけではなく、スル・シタには時間的意味を表しているとは言いにくい場合がある。「そこ、もっと高く跳ぶ！」（命令）、「1185年、鎌倉幕府始まる」（年表の記事）、「あなたは確か川崎に住んでいましたね」（想起）、「よし、買った！」（決意の表出）など。日本語のテンス・アスペクト論では、これらの事実が正面切って問題にされることは少ないけれども、そうした態度は結局スル、シテイル、シタが特定の意味を表す場合だけに光を当てて記述することになっていないか。このような素朴な（しかし、多分まっとうな）問題意識を出発点として、スル、シタ、シテイル形の用法分析を行い、これらの形式は一体何をやっているのか、これらの形式が日本語の述語の体系の中でどのような位置にあるのか、などについて考えて行く。</p> <p>現代語の分析が中心になる。必要に応じて古典語の例も挙げるが、知識が無くてもついていける内容にする。日本語を専攻する人はもちろん、諸言語のテンス・アスペクトに関心のある他言語専攻の人、また、テキスト言語学、認知意味論の分野に関心のある人にも役立つ内容になるかと思う。</p> <p><b>テキスト・参考文献</b></p> <p>テキスト：ハンドアウトを配布します 参考文献：尾上圭介『文法と意味Ⅰ』（くろしお出版、2001）ほか。</p> <p><b>この科目で前提とされる知識など</b></p> <p>日本語学・言語学の入門程度の知識が必要である。古文の知識は前提としません。</p> <p><b>プロフィール</b></p> <p>東京外国語大学大学院教授 国語学（文法、文法論）。 1990年東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了。博士（文学）。 「マジの表す意味——ベシとの対比において——」（『日本研究教育年報』3号、1999）、 「叙法と意味——古代語ベシの場合——」（『日本語学』21巻2号、2002）、『ラ</p>

		ル形述語文の研究』（くろしお出版、2012）、「ベシ」「マイ/マジ」「マシ」ほか（『日本語文法事典』大修館書店、2014）、「打消の推量の助動詞」「推量の助動詞」ほか（『日本語大事典』朝倉書店、2014）など。
火曜日	母語話者として<日本語らしさ>を考える 認知言語学Ⅱ 池上 嘉彦（いけがみ・よしひこ） 東京大学名誉教授 【認知言語学】内容は通年講座(12頁)を参照。	
	英語史の概説を通じて、歴史的・通時的な言語の見方を身につける <b>史的言語学</b> 堀田 隆一（ほった・りゅういち） 慶應義塾大学教授 【史的言語学】	
	講義概要	英語という言語の特徴を理解するためには、それがたどってきた歴史を学ぶことが不可欠です。英語の起源はどこにあるのか、英語に見られる不規則性は何に由来するのか、英語は将来どうなってゆくのか、などの現代的な問題に歴史的・通時的な視点からアプローチすることで、多面的な英語観、言語観を形成することが本講義の目標です。 講義は、主としてスライドおよびハンドアウトを利用して進めます。
	テキスト・参考文献	参考文献は適宜紹介していきますが、まず堀田隆一（著）『英語の「なぜ？」に答えるはじめての英語史』（研究社、2016年）を参照してください。
	この課目で前提とされる知識など	特にありません。
	プロフィール	慶應義塾大学文学部教授 英語史、歴史言語学 PhD (Glasgow University, 2005) 主要著作：『英語の「なぜ？」に答えるはじめての英語史』（研究社、2016年）、『英語史で解きほぐす英語の誤解 --- 納得して英語を学ぶために』（中央大学出版部、2011年）、 <i>The Development of the Nominal Plural Forms in Early Middle English</i> (Tokyo: Hituzi Syobo, 2009)。

水曜日	<p>生成文法を基礎からきちんと学ぶ 生成文法 I 大津 由紀雄（おおつ・ゆきお） 明海大学教授 【生成文法入門】 内容は通年講座(13 頁)を参照。</p>
	<p>意味論・語用論の基礎としての言語哲学 <b>言語哲学</b> 峯島 宏次（みねしま・こうじ） お茶の水女子大学特任准教授 【言語学特殊講義】</p>
講義概要	<p>言語哲学は、理論言語学の中でも特に現代の意味論・語用論と深く関係しています。フレーゲ、ラッセル、ウィトゲンシュタインに始まる言語哲学の考え方は、その後、文法と意味、論理と形式意味論といった「意味論」の周辺の話から、話者の意図や推論、コミュニケーションや言語行為といった「語用論」の話まで、じつに多様な展開を見せています。この講義では、具体的な言語現象に基づいて、意味論・語用論を考慮しながら言語哲学の基礎について講義を行います。言語哲学の問題や概念をできるだけ平易に解説し、言語哲学の観点から意味論と語用論の基礎について考えを深めたいと思います。</p>
テキスト・参考文献	<p>特定の教科書は使用せず、ハンドアウトを配布します。参考文献は随時指示します。</p>
この課目で前提とされる知識など	<p>言語学や哲学に関する予備知識は必要としません。幅広い関心からの参加を歓迎します。</p>
プロフィール	<p>お茶の水女子大学 シミュレーション科学・生命情報学教育研究センター 特任准教授 専門は、言語哲学・意味論・語用論・論理学。2008 年慶應義塾大学大学院文学研究科博士課程（哲学専攻）単位取得退学、博士（哲学）。 『名詞句の世界』（共著、ひつじ書房、2013 年）、『岩波講座哲学 第三巻 言語／思考の哲学』（共著、岩波書店、2009 年）、『論理の哲学』（共著、講談社、2005 年）、W. ライカン『言語哲学—入門から中級まで』（共訳、勁草書房、2005 年）など。</p>

	<p>文に主語があるのはなぜか、主語と題目語の区別がある言語とない言語があるのはなぜかに迫る。 日本語文法理論 尾上 圭介（おのえ・けいすけ 東京大学名誉教授【日本語文法理論】内容は通年講座(14頁)を参照。</p>								
	<p>日常生活に潜むことばの法則を解き明かす</p> <p><b>音韻論入門</b></p> <p style="text-align: right;">窪菌 晴夫（くぼぞの・はるお） 国立国語研究所教授 【音韻論】</p>								
木曜日	<table border="1"> <tr> <td data-bbox="245 577 416 1196">講義概要</td> <td data-bbox="416 577 1497 1196"> <p>日常生活の身近な現象を題材に、音韻論の基本概念と研究の面白さを基礎から解説します。たとえば日本語の五段活用はどうして「行く」ではなく「行かない」という未然形で始まるのか、「寂しい」になぜサビシイとサミシイの2つの発音があるのか、和歌山弁ではどうして「象の銅像」をドウノドウドウというのか、「斎藤」は「藤」はトウなのに「近藤」の藤がドウと濁るのはなぜか、「婆」から派生した2つの語彙（ばあば、ばばあ）の意味が異なるのはどうしてか、「ミッキーマウス」はどうして「ミッキー」という名前なのか等々。特に、母音と子音、母音の有標性、音声素性と母音融合、子音の調音点と調音法、子音の有標性、音素と異音、連濁とライマンの法則、連濁と形態音素交替、モーラの役割、音節構造、語の韻律構造、アクセントの類型、アクセントの規則、音韻構造と統語・意味構造、リズム、以上の15項目を題材に解説を行う予定です。音韻論の基本的な考え方や分析方法を学びながら、未解決の問題に気づくことを目標とします。</p> </td> </tr> <tr> <td data-bbox="245 1196 416 1294">テキスト・参考文献</td> <td data-bbox="416 1196 1497 1294"> <p>テキスト：窪菌晴夫編『よくわかる言語学』（ミネルヴァ書房，2019） 参考文献：講義の中で適宜、紹介します。</p> </td> </tr> <tr> <td data-bbox="245 1294 416 1438">この課目で前提とされる知識など</td> <td data-bbox="416 1294 1497 1438"> <p>言語学の基礎知識があれば、音韻論の専門知識は必須ではありません。主に日本語と英語のデータを分析しますが、他の言語に関心のある人の受講も大歓迎です。</p> </td> </tr> <tr> <td data-bbox="245 1438 416 1771">プロフィール</td> <td data-bbox="416 1438 1497 1771"> <p>国立国語研究所 理論・対照研究領域 教授</p> <p>音韻論、音声学。1986年英国エジンバラ大学大学院（言語学）修了，Ph.D.（1988年）。一般言語学や言語類型論の視点から日本語の音韻構造と音韻構造の普遍性・多様性を研究している。主な著書に <i>The Organization of Japanese Prosody</i> (1993)、『語形成と音韻構造』（1995）（くろしお出版）、『日本語の音声』（1999）、『アクセントの法則』（2006）、『数字とことばの不思議な話』（2011）（岩波書店）、『通じない日本語』（2017，平凡社）。</p> </td> </tr> </table>	講義概要	<p>日常生活の身近な現象を題材に、音韻論の基本概念と研究の面白さを基礎から解説します。たとえば日本語の五段活用はどうして「行く」ではなく「行かない」という未然形で始まるのか、「寂しい」になぜサビシイとサミシイの2つの発音があるのか、和歌山弁ではどうして「象の銅像」をドウノドウドウというのか、「斎藤」は「藤」はトウなのに「近藤」の藤がドウと濁るのはなぜか、「婆」から派生した2つの語彙（ばあば、ばばあ）の意味が異なるのはどうしてか、「ミッキーマウス」はどうして「ミッキー」という名前なのか等々。特に、母音と子音、母音の有標性、音声素性と母音融合、子音の調音点と調音法、子音の有標性、音素と異音、連濁とライマンの法則、連濁と形態音素交替、モーラの役割、音節構造、語の韻律構造、アクセントの類型、アクセントの規則、音韻構造と統語・意味構造、リズム、以上の15項目を題材に解説を行う予定です。音韻論の基本的な考え方や分析方法を学びながら、未解決の問題に気づくことを目標とします。</p>	テキスト・参考文献	<p>テキスト：窪菌晴夫編『よくわかる言語学』（ミネルヴァ書房，2019） 参考文献：講義の中で適宜、紹介します。</p>	この課目で前提とされる知識など	<p>言語学の基礎知識があれば、音韻論の専門知識は必須ではありません。主に日本語と英語のデータを分析しますが、他の言語に関心のある人の受講も大歓迎です。</p>	プロフィール	<p>国立国語研究所 理論・対照研究領域 教授</p> <p>音韻論、音声学。1986年英国エジンバラ大学大学院（言語学）修了，Ph.D.（1988年）。一般言語学や言語類型論の視点から日本語の音韻構造と音韻構造の普遍性・多様性を研究している。主な著書に <i>The Organization of Japanese Prosody</i> (1993)、『語形成と音韻構造』（1995）（くろしお出版）、『日本語の音声』（1999）、『アクセントの法則』（2006）、『数字とことばの不思議な話』（2011）（岩波書店）、『通じない日本語』（2017，平凡社）。</p>
講義概要	<p>日常生活の身近な現象を題材に、音韻論の基本概念と研究の面白さを基礎から解説します。たとえば日本語の五段活用はどうして「行く」ではなく「行かない」という未然形で始まるのか、「寂しい」になぜサビシイとサミシイの2つの発音があるのか、和歌山弁ではどうして「象の銅像」をドウノドウドウというのか、「斎藤」は「藤」はトウなのに「近藤」の藤がドウと濁るのはなぜか、「婆」から派生した2つの語彙（ばあば、ばばあ）の意味が異なるのはどうしてか、「ミッキーマウス」はどうして「ミッキー」という名前なのか等々。特に、母音と子音、母音の有標性、音声素性と母音融合、子音の調音点と調音法、子音の有標性、音素と異音、連濁とライマンの法則、連濁と形態音素交替、モーラの役割、音節構造、語の韻律構造、アクセントの類型、アクセントの規則、音韻構造と統語・意味構造、リズム、以上の15項目を題材に解説を行う予定です。音韻論の基本的な考え方や分析方法を学びながら、未解決の問題に気づくことを目標とします。</p>								
テキスト・参考文献	<p>テキスト：窪菌晴夫編『よくわかる言語学』（ミネルヴァ書房，2019） 参考文献：講義の中で適宜、紹介します。</p>								
この課目で前提とされる知識など	<p>言語学の基礎知識があれば、音韻論の専門知識は必須ではありません。主に日本語と英語のデータを分析しますが、他の言語に関心のある人の受講も大歓迎です。</p>								
プロフィール	<p>国立国語研究所 理論・対照研究領域 教授</p> <p>音韻論、音声学。1986年英国エジンバラ大学大学院（言語学）修了，Ph.D.（1988年）。一般言語学や言語類型論の視点から日本語の音韻構造と音韻構造の普遍性・多様性を研究している。主な著書に <i>The Organization of Japanese Prosody</i> (1993)、『語形成と音韻構造』（1995）（くろしお出版）、『日本語の音声』（1999）、『アクセントの法則』（2006）、『数字とことばの不思議な話』（2011）（岩波書店）、『通じない日本語』（2017，平凡社）。</p>								

	<p>静態的・出力説的な文法観に対する動態的・過程説的な文法観の必要性を示す。          文法原論 梶田 優（かじた・まさる）上智大学名誉教授【言語学特殊研究】内容は通年講座（15頁）を参照。</p>
<p>金曜日</p>	<p>言語学の「発見」とパラダイム形成を追体験</p> <p><b>言語学概論</b></p> <p style="text-align: right;">大堀 壽夫（おおほり・としお）          慶應義塾大学教授  <b>【言語学概論】</b></p>
<p>講義概要</p>	<p>言語学という分野は、少なくとも西欧においては、18世紀末にWilliam Jonesがインド＝ヨーロッパ語族を「発見」した時に始まったとされています。それ以降、19世紀の比較言語学、20世紀前半の共時言語学・構造主義、20世紀後半の生成文法、そして20世紀末から現代までのパラダイムの多様化の時代へとつながっています。この授業では、各時代の代表的な研究の抜粋を読みつつ、言語学の基本的な見方や分析方法を学ぶことを目標とします。</p>
<p>テキスト・参考文献</p>	<p>テキスト：なし          参考書：各自で言語学の入門書を購入して、講義内容とクロスチェックすることを推奨。</p>
<p>この課目で前提とされる知識など</p>	<p>予備知識は特に必要ありません。</p>
<p>プロフィール</p>	<p>Ph.D.（言語学）を1992年にUC Berkeleyより取得。主として意味論、機能的類型論（特に接続構造の類型と通時相）、談話分析、日本語、英語、東アジア諸語について研究。『認知言語学』（2002, 東京大学出版会）、「従属節の階層を再考する：南モデルの理論的基盤」（2014, 益岡隆志他編『日本語複文構文の研究』, ひつじ書房）、M. トマセロ編『認知・機能言語学』（共訳2011, 研究社）。</p>

時間：19：00－20：40（100分）

後期 2019年9月30日～ 全10回（祝祭日の講義はありません）

	Langacker を読む--認知文法の基礎から最前線まで--	
	<b>認知言語学 I</b>	
	西村 義樹（にしむら・よしき） 東京大学教授 【認知言語学入門】	
月曜日	講義概要	昨年度に引き続き、「日常の言語使用を可能にする知識の中で文法と意味はどのように関係しているのか？」という言語学の根本問題に対する認知文法の考え方を、この理論の創始者 Ronald W. Langacker の著作を正確に読み解くことを通して、多角的に検討します。その中で、「言語知識・文法・意味とは何か」をめぐる認知文法独自の考え方や対立する理論との本質的な違いが鮮明になるはずです。なお、扱う文献は受講生の興味関心も参考にして決める予定ですが、導入部分以外は、できるだけ昨年度とは異なる文章を選ぶようにします。
	テキスト・参考文献	講義中に読み解く文献については講義中にコピーを配布します。必要に応じて、Langacker の著作以外の文献を取り上げる可能性もあります。
	この課目で前提とされる知識など	認知文法を含む) 認知言語学についての知識は前提としないが、受講前に西村義樹・野矢茂樹著『言語学の教室：哲学者と学ぶ認知言語学』（中央公論新社）を通読することをお勧めします。
	プロフィール	東京大学文学部（言語学研究室）教授 専門は認知言語学、意味論、日英語対照研究。 1989年東京大学大学院人文科学研究科博士課程（英語英米文学専攻）中退。 『構文と事象構造』（共著、研究社、1998）、『認知言語学 I：事象構造』（編著、東京大学出版会、2002）、『言語学の教室：哲学者と学ぶ認知言語学』（共著、中公新書、2013）、『明解言語学辞典』（共編著、三省堂、2015）、『日英対照 文法と語彙への統合的アプローチ：生成文法・認知言語学と日本語学』（共編著、開拓社、2016）、『メンタル・コーパス：母語話者の頭の中には何があるのか』（共編訳、くろしお出版、2017）、『認知文法論 1』（編著、大修館書店、2018）など。

月曜日	言語の社会性はどのように在るのか <b>社会言語学</b> 嶋田 珠巳 (しまだ・たまみ) 明海大学教授 【社会言語学】	
	講義概要	ことばは個人的なものであり、かつ社会的なものでもあります。本講義ではこのテーマを「言語接触」と「言語と思考」という二つの方向に開きます。社会言語学の意義と可能性を検討したうえで、前半では、言語接触の様々な現象を、言語、話者、コミュニティ、社会の側面から具体的に見ていきます。後半は、とくに言語範疇と文化・思考、言語・脳・社会について考えます。授業は、講義に加え、諸文献を用いて理解を深め、ディスカッションを交えながら行います。1~2回程度ゲスト講師を招く予定。初めて社会言語学に触れる方から研究の領域に足を踏み込んでいる方まで、幅広い受講を想定しています。
	テキスト・参考文献	テキスト：嶋田珠巳・斎藤兆史・大津由紀雄編『言語接触と日本語の未来』東京大学出版会、2019年春刊行。ハンドアウト、資料文献を配布し、参考文献を適宜紹介します。
	この課目で前提とされる知識など	特にありません。教室でのディスカッションがあらたな知のきっかけになることを期待しています。
	プロフィール	明海大学外国語学部教授。社会言語学、言語接触、アイルランド英語。2007年京都大学大学院文学研究科行動文化学専攻言語学専修博士後期課程修了。博士(文学)。著書に、『英語という選択-アイルランドの今』(岩波書店2016年)、 <i>English in Ireland: Beyond Similarities</i> (溪水社2010年)、共編著に『英語の学び方』(ひつじ書房2016年)。主な論文として“Speakers’ awareness and the use of <i>do be</i> vs. <i>be after</i> in Hiberno-English”, <i>World Englishes</i> 35, 2016年など。
火曜日	語話者として<日本語らしさ>を考える 認知言語学Ⅱ 池上 嘉彦 (いけがみ・よしひこ) 東京大学名誉教授 【認知言語学】内容は通年講座(12頁)を参照。	
	世界の多様な言語音を正しく聞き分け発音し分ける訓練を通してよりよく理解する <b>音声学の基礎知識と実践的技能</b> 中川裕 (なかがわ・ひろし) 東京外国語大学教授 【音声学】	
	講義概要	この授業では、能動的な音声学的技能の実習をしながら、音声学の基礎を身につけることを目指します。実習は、調音音声学と音響音声学に関わります。調音の実習としては、IPA (International Phonetic Alphabet) の枠組みをもとにして、世界の言語で`音素的な区別に用いられている多様な単音の(i)聞き分け、(ii)発音模倣、(iii)模倣した発音の内省、(iv)内省による音声特徴の特定の技能練習をします。それに加えて、音響音声学の初歩として、Praat(インターネットで`容易に入

	<p>手でできる音声学ソフトウェア)を利用しなから、類似する音素と音素の間の音声的な差異や、同一音素の異音と異音の間の音声的な差異から、波形やスペクトログラムにとどのように反映するかを読み取る実習も行います。音響信号の読み取りはスライドで示しなから練習を進めるので、ノートパソコンを持参する必要はありません。</p> <p>この授業で扱う言語音は主として分節音で、最初に肺臓気流による子音、次に非肺臓気流による子音、最後に母音という順序で技能訓練を進めます。この授業を通して得た実践音声学的技能は、音声学・音韻論的な記述の正確な読解によって理論的な考察をするためにも、言語音の歴史的な変化についてよりよく理解するためにも、言語の現地調査を自分自身で実施するためにも、音声学・音韻論の応用的研究をするためにも、役に立つはずで。</p>
テキスト・参考文献	適宜プリントを配布します。
この課目で前提とされる知識など	特にありません。
プロフィール	<p>東京外国語大学総合国際学研究院教授；PhD (Linguistics)</p> <p>音声学、音韻論、音韻類型論、コイサン言語学</p> <p>主要業績は下記のページをご覧ください。</p> <p><a href="https://researchmap.jp/read0158227/">https://researchmap.jp/read0158227/</a></p>
水曜日	<p>生成文法を基礎からきちんと学ぶ</p> <p>生成文法Ⅰ 大津 由紀雄 (おおつ・ゆきお) 明海大学教授</p> <p>【生成文法入門】 内容は通年講座(13頁)を参照。</p>
	<p>「意味」の意味を掘り下げる</p> <p><b>意味論の基礎</b></p> <p style="text-align: right;">酒井 智宏 (さかい・ともひろ)</p> <p style="text-align: right;">早稲田大学准教授</p> <p style="text-align: right;">【意味論】</p>
講義概要	<p>意味論は理論言語学の中で一番とつきやすい分野に見えて実は一番とつきにくい分野です。その理由の一つは、ただの「意味論」という分野が存在しないことです。存在するのは形式意味論、語彙意味論、認知意味論、etc. であって、「意味論」ではありません。この講義では、どの立場に立つにせよ、意味について最低限心得ておきたい問題をじっくり考えてみます。昨年度から継続して受講する方にとっても、本年度から新たに受講する方にとっても、等しく有意義な講義となるように努めます。</p>
テキスト・参考文献	プリントを配布します。参考文献は、授業中に紹介します。
この課目で	予備知識は必要ありません。

	前提とされる知識など	
	プロフィール	早稲田大学文学学術院准教授 意味論、語用論 2003年東京大学大学院総合文化研究科博士課程修了、博士（学術） 2004年パリ第8大学大学院言語学専攻博士課程修了、Docteur en Sciences du Langage 主要著作：『最新理論言語学用語事典』（分担執筆、朝倉書店、2017）、『理論言語学史』（分担執筆、開拓社、2017）
木曜日	文に主語があるのはなぜか、主語と題目語の区別がある言語とない言語があるのはなぜかに迫る。 日本語文法理論 尾上 圭介（おのえ・けいすけ 東京大学名誉教授【日本語文法理論】内容は通年講座（14頁）を参照。	
	ことばの理解と産出の過程を探る <b>心理・神経言語学</b>	酒井 弘（さかい・ひろむ） 早稲田大学教授 【言語心理学】
	講義概要	ことばの研究が対象とする疑問は、（1）なにを（ことばの体系や原理）、（2）どのように（ことばの理解や産出の過程）、（3）どこで（ことばを生み出しているのは脳のどこか）という3つに分けることができます。この講義では（2）を中心としつつ、ときに（3）に及ぶ疑問に答えようとする研究分野である心理言語学と神経言語学について、研究の歴史、基本的な考え方、研究方法を、いくつかの実例を通して学んで行きます。紹介する研究方法には、読文時間や視線の計測、脳波や脳機能イメージの計測などが含まれます。
	テキスト・参考文献	適宜プリントを配布します。
	この課目で前提とされる知識など	特に前提とする知識は想定していません。
	プロフィール	早稲田大学理工学術院教授 カリフォルニア大学アーヴァイン校大学院修了（Ph.D., 1996）、2015年から早稲田大学理工学術院教授。ことばを聞くととき・話すとき、わたしたちの脳の中でなにが起こっているのかという問いに、人間の行動、視線、脳波などを手がかりとして答えようとしています（ <a href="http://www.celese.sci.waseda.ac.jp/faculty/sakai">http://www.celese.sci.waseda.ac.jp/faculty/sakai</a> ）。
金曜日	静態的・出力説的な文法観に対する動態的・過程説的な文法観の必要性を示す。 文法原論 梶田 優（かじた・まさる）上智大学名誉教授【言語学特殊研究】内容は通年講座（15頁）を参照。	
	ことばの変化を分析する	

## 歴史言語学入門

長屋 尚典（ながや・なおのり）

東京外国語大学准教授

【言語学入門】

### 講義概要

歴史言語学は言語の変化に関する研究を行う言語学の分野です。この授業では、はじめて歴史言語学を学ぶ人を対象に、さまざまな言語変化現象を取り上げながら、歴史言語学のトピックを一緒に考えていきます。言語変化の事実を音声・音韻、形態論、統語論、意味論について観察することにはじまって、比較言語学から言語系統学、社会言語学、機能主義言語学などの言語変化についての理論的アプローチを紹介し、いろいろな角度から言語変化を考えていきたいと考えています。扱う言語はインド・ヨーロッパ語族やオーストロネシア語族が中心となりますが、日本語の現象もできるだけとりあげます。

授業予定は以下の通りです。受講者の興味関心によって内容が変更になる場合もあります。

1. 音声・音韻の変化 (I)
2. 音声・音韻の変化 (II)
3. 形態論の変化
4. 統語論の変化
5. 意味の変化
6. 比較言語学 (I)
7. 比較言語学 (II)
8. 言語系統学と社会言語学的アプローチ
9. 用法基盤モデルによるアプローチ
10. 文法化と構文化

### テキスト・参考文献

適宜プリントを配布します。

### この課目で前提とされる知識など

言語の歴史を研究するには言語学の全分野にわたる基礎的知識が必要です。授業内でも適宜解説していきますが、言語学概論程度の知識をもっておくことが望ましいです。

### プロフィール

東京外国語大学総合国際学研究院准教授  
PhD in Linguistics (Rice University, 2011)  
オーストロネシア諸語、フィールド言語学、言語類型論  
主要著作・論文: *Japanese/Korean Linguistics*, Volume 22 (2015, CSLI Publications; Mikio Giriko, Akiko Takemura, Timothy J. Vance との共編著),  
“Demonstrative prepositions in Lamaholot” (*NUSA*, 2017), “Focus and prosody in Tagalog” (*Perspectives on Information Structure in Austronesian Languages*, 2018) など。

通年講座（前期と後期でセットの講座）

時間：19：00－20：40（100分）

前期 2019年5月13日～ 全10回

後期 2019年9月30日～ 全10回（祝祭日の講義はありません）

火曜日	母語話者として<日本語らしさ>を考える  <b>認知言語学Ⅱ</b>  <p style="text-align: right;">池上 嘉彦（いけがみ・よしひこ） 東京大学名誉教授、昭和女子大学名誉教授 【認知言語学】</p>
講義概要	<p>母語以外の言語と接触してすぐ感じられるのは、同じ状況を言うにせよ、時にはずいぶん違った言い回し（表現の仕方）をするものだということです。例えば、道に迷って人に尋ねるとき、日本語ではふつう「ここはどこですか」と言いますが、「私ハドコニイマスカ」（例えば英語の “Where am I?”）式の言い方をする言語も多くあります。日本語話者には後者のような言い方は&lt;奇妙&gt;にすら感じられますが、後者のような言い方をする言語の話者なら日本語式の言い方について同じ印象を抱くでしょう。（日本語の場合でも、地図を示しながら道を尋ねる時は「私ハ（イマ）ドコニイマスカ」と言っても&lt;奇妙&gt;な感じはまったくありません。どうしてでしょうか。）普通の言語学の授業や文法書などからは、言語間での語形変化や語順の違いなどは教えられますが、上述のような&lt;好まれる言い回し&gt;の違いまでは話が及びません。</p> <p>認知言語学では、言語の&lt;話者&gt;が具体的な場面で発話する際、どのような（心的）過程を経るのかに関心を寄せます。何を表現し、何を表現しないでおくか、表現することに関しては、それをいかに表現するか——こういったことを話者は発話の場、対話の相手、それに自らの発話の意図にも配慮しつつ、もっとも&lt;適切&gt;（relevant）と判断したやり方で言語化する——そういった&lt;認知的&gt;（cognitive）な処理を殆んど瞬時のうちにしているというわけです。認知言語学では、このような過程を&lt;事態把握&gt;（construal）と呼んでいます。ある言語の&lt;好まれる言い回し&gt;の背後には、その言語の話者によって&lt;好まれる事態把握&gt;があるはずですが、しかも、それは人間の社会的な営みの多くがそうであるように、慣習化され、身についた程度に応じて無意識化され、‘habitus’ と称される存在の一部となります。</p> <p>本講では、このような視点から&lt;日本語らしい&gt;言い回しの検討を試みます。そのためには、日本語にそれなりの言語的直観があることは前提ですが、日本語非母語話者でも、日本語習得の高度なレベルでの学習として日本語話者の直観を体得してみたいということであれば、歓迎です。</p>
テキスト・	近藤安月子・姫野伴子編著『日本語文法の論点43』（研究社、2012）。本年

参考文献	<p>度は第3章「現場性」（第16－21課）を中心に取りあげます。</p> <p>〔参考文献など〕池上嘉彦『日本語と日本語論』（ちくま学芸文庫）、『英語の感覚・日本語の感覚』（NHK出版）、（守屋三千代と共編著）『自然な日本語を教えるために——認知言語学をふまえて』（ひつじ書房）、近藤安月子『日本語らしさの文法』（研究社）、その他、必要に応じて指示、ないし、プリントで配布。</p>
テキスト・参考文献	<p>認知言語学の予備知識は特に必要とするものではありません。</p>
プロフィール	<p>東京大学名誉教授、日本認知言語学会名誉会長</p> <p>東京大学で英語英文学(B.A., M.A.)、Yale 大学大学院で言語学(M.Phil., Ph.D.)を専攻。インディアナ大学、ミシガン大学、ベルリン自由大学、チュービンゲン大学、北京日本学研究中心、などで客員教授、ハンブルク大学、ロンドン大学、などで客員研究員。</p> <p>著書：『英詩の文法』、『意味論』、『「する」と「なる」の言語学』、『ことばの詩学』、『詩学と文化記号論』、『記号論への招待』、『＜英文法＞を考える』、『日本語と日本語論』、『自然と文化の記号論』、『英語の感覚・日本語の感覚』など。</p>
水曜日	<p>生成文法を基礎からきちんと学ぶ</p> <p><b>生成文法 I</b></p> <p style="text-align: right;">大津 由紀雄（おおつ・ゆきお） 明海大学教授 【生成文法入門】</p> <p>前期は認知科学・理論生物学としての生成文法について講じます。生成文法や認知科学についての知識は前提とせず、できるだけわかりやすく話をします。生成文法の思考法を正確に理解し、その思考法の実際の適用を批判的に検討します。</p> <p>後期は、主として統語論を例に生成文法の言語分析の方法を講じます。日本語と英語を例とした生成文法の優れた教科書を用いて、そこかしこに現れる生成文法の思考法について解説します。《生成文法に興味はあるが、よくわからない》、《生成文法に入門すべくなんどか試みたがうまくいかなかった》というかた、ぜひこのコースを受講してみてください。生成文法Ⅱを受講するための基礎作りとしての受講もお勧めします。一応、講義形式で進めますが、できるだけ演習の要素も取り入れます。</p> <p>テキスト・参考文献 （前期）Noam Chomsky (1965) <i>Aspects of the Theory of Syntax</i>. の第1章など、生成文法の基礎について書かれた文献を適宜参照します。文献情報などはその都度、伝えます。 （後期）渡辺明. 2009. 『生成文法』 東京大学出版会.</p> <p>この課目で前提とされる知識など 知的好奇心のみです。</p> <p>プロフィール 明海大学外国語学部教授、慶應義塾大学名誉教授。 日本認知科学会フェロー。言語の認知科学（生成文法、言語心理学）、メタ言語能</p>

	<p>力を基盤とする言語教育。Ph. D. (MIT)。最近の著作に、今西典子・大津由紀雄。2017. 「時間表現の発達---時間の言語化にみられる普遍性と多様性の観点からの考察」 <i>Brain and Nerve</i> 69(11) 1251-1271、大津由紀雄。2016. 「ことばについて知ることの大切さ」 『日本語学』 35(2) 2-12、大津由紀雄。2015. 「ことばの認知科学」 <i>Clinical Neuroscience</i> 38(3) 877-881 などがある。</p>
木曜日	<p>文に主語があるのはなぜか、主語と題目語の区別がある言語とない言語があるのはなぜかに迫る。 日本語文法理論</p> <p style="text-align: right;">尾上 圭介（おのえ・けいすけ） 東京大学名誉教授 【日本語文法理論】</p> <p>日本語の文法をめぐって根源的に考えることの面白さを伝えたい。今年度は、主語、題目語、係助詞に関して。</p> <p>○「猫がいる」「ひもが切れた」「雪は白い」「背中が冷たい」などがすべて主語であると言えるのはなぜか。意味的に言えば「存在するもの」「変化の主体」「属性の持ち主」「感覚の発生場所」と多様である。それらがすべて文法的には主語であるとはどういうことか。「いや、外国語でもそれらの意味役割に立つ名詞項は主語だから」と言うのは答えにならない。事実としても、上例の「猫が」は中国語では主語ではないし、英語でも主語か否か決めにくい。上の全例を日本語では主語だと言うなら、日本語の主語とはどのように規定できるか。</p> <p>○そもそもどの言語でも文に主語と述語が（原理的に）あるのはなぜか。——当たり前に見える現象に対して「なぜ」を問うところから、文法理論の面白さが始まる。一般に主語のない文というものは、ないのか。日本語には主語はないという議論に正当な根拠はあるのか。</p> <p>○「ガ」で示される主語と「ハ」で示される主語（題目語と呼ばれる）との違いは何か。状況や文脈によって、「ガ」の主語と「ハ」の主語の片方だけが自然に見える場合が多いのは確かだが、どちらを使っても言える場合もあり、どちらを使っても日本語として不自然だというケースもある。そういう事実の精密な記述が必要である。自信をもって日本語教育をするためには、主語と題目語に関する理論的な理解とともに、見落とししがちな事実の把握が大事である。</p> <p>○文頭の名詞に「ハ」（係助詞の一つ）が付いたら、なぜ題目語になりやすいのか。——そんなことは問うまでもない、「ハ」というのは題目語を形成するための助詞だろう、と言うのでは答えにならない。同じ係助詞でも「モ」は題目を提示しない（題目語概念を曖昧にしたうえで「Xモ」を題目語だとする人もあるにはあるが）し、文頭の「Xハ」でも題目語とは言えない場合がある（「あまり来なかったらろう？」「田中さんは来たよ」/「雨は降る降る。城ヶ島の磯に」）。古代語まで視野に入れても、係助詞のごく一部が題目提示をするに過ぎない。係助詞と題目提示助詞とは別の概念である。そもそも、「ハ」のと題目提示の用法と、それ以外の用法との関係はどのようなものであろうか。</p> <p>主語、題目語、係助詞をめぐると問題は事実としても複雑、微妙で、「題目語とは</p>

		何か」「係助詞とは何か」など理論的にも簡単ではない。そのような面白い領域に、母語ゆえの感覚もって立ち向かっていくことをお勧めしたい。
	参考図書	尾上圭介「主語と述語をめぐる文法」朝倉日本語講座6巻（文法Ⅱ）、2004、朝倉書店
	前提とされる知識など	特に必要ない
	プロフィール	大阪市生まれ。博士（文学）。専攻は文法論、意味論、文法史、および「大阪のことばと文化」。日本笑い学会理事。東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了。著書に『文法と意味Ⅰ』（くろしお出版、2001）、『大阪ことば学』（岩波現代文庫、2010）、『朝倉日本語講座 第6巻（文法Ⅱ）』（編著、朝倉書店、2004）、日本語文法学会編『日本語文法事典』（共編、大修館書店、2014）など。
金曜日		<p>静態的・出力説的な文法観に対する動態的・過程説的な文法観の必要性を示す。</p> <p><b>文法原論</b></p> <p style="text-align: right;">梶田 優（かじた・まさる） 上智大学名誉教授 【言語学特殊研究】</p>
	講義概要	最近数年間の理論言語学研究の実質的な部分を整理、吸収しつつ、動的文法理論の構築を進めます。（1）品詞、機能範疇、構文などの多様性と画一性、（2）述語構造・論理構造・情報構造・発話行為の四者の統語形式への写像における相互作用、（3）表現手段の線状性の文法への影響、等々を体系的に説明するためには、現行の静態的・出力説的な言語理論では不十分で、動態的・過程説的な視点が必要になることを示します。個別言語研究、言語類型論、通時言語学、言語心理学などから資料を採ります。神経科学、発生生物学、比較動物学、言語進化論などの成果を援用します。（春期講座で動的文法観の基本を説明します。）
	テキスト・参考文献	参考文献については講義中に紹介します。
	この課目で前提とされる知識など	授業は講義形式。「生成文法入門」程度の予備知識が望ましいですが、トピックごとに基礎を簡単に復習してから話を進めますので、入門未修者も（面接ガイダンスのうえ）受講可。
	プロフィール	上智大学名誉教授 英語学、言語学 1967年プリンストン大学 Ph. D. (言語学)。東京教育大学、東京学芸大学、上智大学で英語学、言語学を担当。『文法論Ⅱ』（共著、大修館、1974）、「生成文法の思考法(1)－(48)」(『英語青年』、研究社、1977-1981)など。

理論言語学講座夏期集中

期間：認知語用論 2019年8月10日（土）～12日（月）

8月10日 (土)～ 12日(月)	コミュニケーション力の構成要素は何かー認知語用論から考える  <b>認知語用論</b>  松井 智子 (まつい・ともこ) 東京学芸大学教授 <b>【語用論】</b>
	語用論、心理学の視点から、言語コミュニケーションのメカニズムを検討します。関連性理論の基本的な概念について学習しながら、語用論が扱う主な言語現象を把握します。また、コミュニケーション力はどのような認知能力から構成されており、それらがどのように発達し、機能するのかについて、コミュニケーションの障害も視野に入れながら、検討します。授業は講義とグループディスカッションで構成されます。昨年度から継続して受講される方にも、今年度から受講される方にも新しい発見があるはずです。
テキスト・参考文献	テキスト：適宜プリントを配布します。 参考文献：松井智子著『子どものうそ 大人の皮肉』（岩波書店，2013）。
この課目で前提とされる知識など	とくに前提とされる知識はありません。
プロフィール	東京学芸大学国際教育センター教授 1995年英国ロンドン大学大学院修了，Ph.D（言語学）。関連性理論を枠組みとした研究に取り組むとともに、実験的な手法を用いて、語用論の発達と障害について研究をしている。著書に Bridging and Relevance (John Benjamins, 2000, 市河賞)、『子どものうそ、大人の皮肉』（岩波書店2013年）、『ソーシャルブレインズ』（分担執筆、東京大学出版会、2009）、『ミス・コミュニケーション』（分担執筆、ナカニシヤ、2011）などがある。
8月23日 (金)～8月25日 (日)	日本語の具体的な言語事実の観察，記述から，理論的な説明へ  <b>日本語文法と一般言語理論</b>  三宅 知宏 (みやけ・ともひろ) 大阪大学教授 <b>【言語学特殊講義】</b>
講義概要	本講義は、普遍的な一般言語理論を視野に入れながら、個別言語としての日本語について、特に「文法」（形態論，統語論，意味論，語用論との接点を含む）の分野を中心に、議論します。今年度は、具体的な内容として、一般にモダリティと呼ばれる表現（「推量」，「疑問表現（確認要求的表現を含む）」等）とその関連分野の問題を取り上げる予定です。なお、本講義は、日本語の「文法」に関して、①一般言語理論研究を行う上での基礎的な知識を得たい方、②日本語教育を行う上での

	知識を得たい方，③専門的な日本語研究を進める上での知識を得たい方，④知的興味がある方，を対象としています。
テキスト・参考文献	適宜プリントを配布します。
この課目で前提とされる知識など	講義は，受講にあたっての特別な知識は必要としません。昨年度に引き続きの開講になりますが，講義の内容は異なりますので，今年度はじめての受講，昨年度から連続の受講のいずれでも，問題はありません。
プロフィール	<p>大阪大学大学院文学研究科教授 日本語学・言語学</p> <p>1997年大阪大学大学院文学研究科博士後期課程退学。博士（文学）。</p> <p>『日本語研究のインターフェイス』（くろしお出版 2011），『日本語と他言語』（神奈川新聞社 2007），『語彙論的統語論の新展開』（共編著 くろしお出版 2017）等</p>